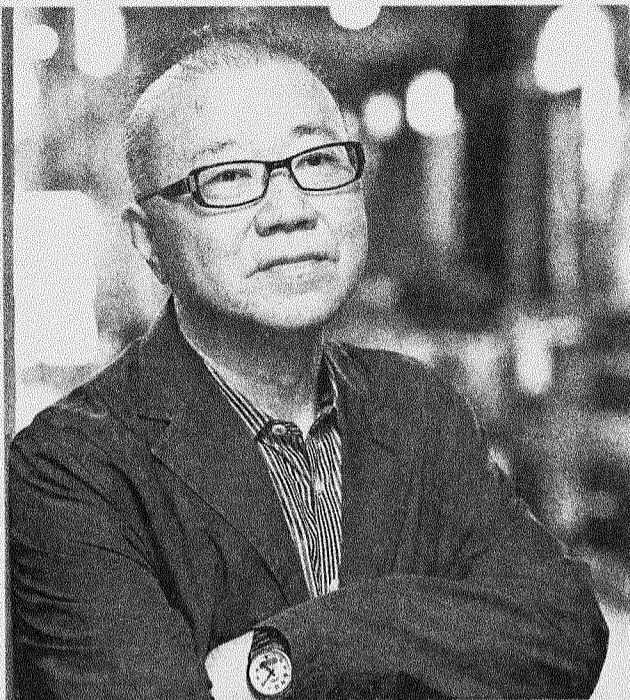


ドクター元ちゃん がんになる

西村 元一
金沢赤十字病院副院長

患者の笑顔取り戻す

「元ちゃんハウス」で楽しむ会話



丸山博撮影

がん患者が気軽に立ち寄れる場所として計画していた「元ちゃんハウス」が、昨年12月1日、金沢市内にオープンしました。従来開いていた患者と医療者の語り合いの場だった「金沢マギー」と場所が変わったことなどもあり、皆さんが集まってくれるだろうか心配していました。が、オープンからほぼ2カ月間に、延べ250人余りと多くの利用がありました。

にしむら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんともきあう会」代表。

特に、平日午前11時〜午後3時という時間帯は「来てくれる人がいるのか」と本当に心配でしたが、ふたを開けてみると初日から少なくとも数人、多いときは十数人と、「予想外」ともいえる多くの利用者がありました。月3回の開催だった「金沢マギー」とは異なり、常設化したことで、電話での問い合わせも多くなっています。

第2、第4火曜と第1土曜には、以前と同様にがん患者と、がんに詳しい医師や看護師、臨床心理士らが集まる「金沢マギー」を開きます。その際は、以前からの常連の皆さん、新しい患者や家族とスタッフが、真ん中に置いたケヤキのテーブルを囲み、和気あいあいと会話を楽

しみ、時には終了の声がかげにくいこともあるほどです。

周りのソファや畳の小上がりには置いたテーブルでは、訪れた患者の皆さんが、入れ代わり立ち代わり個人的な問題をスタッフに相談しています。「金沢マギー」の日は、いろいろな医療関係の職種メンバーが10人余り参加するため、この日を狙ってやってくる患者もいます。

最近では、元ちゃんハウスで生まれた「がん友」同士で連絡を取り合う患者がいたり、患者が新しい患者を連れて来たりすることも少なくありません。

昔のように、ほとんどのがん治療が「入院」という形で病院内で行われていた時は、医療者によるさまざまなサポートを受けられましたが、今は、多くの治療が外来で実施されます。すると、医師らと十分なコミュニケーションがとれている患者はよいのですが、そうではない患

者が孤立してしまうことも少なくありません。

私は、そのような患者や家族のために「元ちゃんハウス」を作りました。今後もハウスを維持し、継続していくためには、資金集めと、思いを共有してくれるボランティア集めという大きな課題があります。それでも、うつむき気味に「元ちゃんハウス」の玄関を入って来た患者が、少し笑顔を取り戻して「また来ます」と言って帰っていく姿を見ると、「やはり始めてよかった」と非常にやりがいを感じます。

驚いたことに「元ちゃんハウス」のスタッフも、同じように感じてくれているようなのです。つまり、サポートを受ける患者や家族の皆さんと、サポートを担うスタッフの双方にとって「Win Win(双方の勝ち)」の関係になっていくことは間違いないと断言します。

次回3月26日掲載